

耐火構造（屋根 30分）

軽量鉄骨造屋根の下地(野地)に用いる木質系セメント板の標準施工要領書

一般社団法人 全国木質セメント板工業会

1. 総則

この施工要領書は、建設省告示第 1399 号（30分耐火構造）の屋根の野地板への木質系セメント板（硬質木毛セメント板、硬質木片セメント板）の施工について適用する。

但し、実際の使用に際しては、メーカーの施工の可否や留意点等事前に問い合わせる。

2. 使用材料

1) 野地板

・規格 JISA5404（木質系セメント板）

・名称・厚さ

① 硬質木毛セメント板 厚さ 25mm 以上

② 硬質木片セメント板 厚さ 18mm 以上

3. 施工方法

1) 下地組み

- ・支持材（たるき）は、軽量形鋼 C-100×50×2.3mm 以上を使用し、木質系セメント板の接合部は 2 本組みにして、606mm 以内の間隔に組む。
- ・母屋は、荷重（固定、風圧、積雪）と支持スパンによって設定し、1 時間耐火被覆を行う。但し、床面から梁下までの高さが 4m 以上で、その直下に天井がない場合、又は直下に不燃材料又は準不燃材料で造られた天井がある場合は、耐火被覆は必要ない（国土交通省告示第 472 号）。
- ・木質系セメント板の施工時には、留め付け不良や木質系セメント板の板割れを防止するために、鉄骨下地の原寸チェックを行う。

2) 木質系セメント板の施工（切断、留め付け）

- ・木質系セメント板の切断には、外装用カッター（ダイヤモンドチップソー）又はスレート用鋸を用いる。
- ・木質系セメント板の接合部は、軽く突き付ける程度とする。
- ・木質系セメント板の留め付けには、リーマ付きドリルねじ（径：4mm 以上、長さ：木質系セメント板厚さ+20mm 程度）を使用する。

留め付け間隔は 300mm 以内、端空き距離は 25～35mm 程度とする。

※タッピンねじで施工する際は、必ず先孔を空け、径は 4mm 以上で、木質系セメント板厚さ+15mm 以上の長さのねじを使用する。

3) 屋根葺材

- ・木質系セメント板の施工後は、速やかにアスファルトルーフィングを施工する。木質系セメント板が雨に濡れた場合は、しみ、汚れ、波打ち、強度低下を防ぐため、木質系セメント板を充分乾燥させた後にアスファルトルーフィングを施工する。
- ・屋根葺材は、建築工事標準仕様書（JASS-12 屋根工事）や鋼板製屋根構法標準(SSR2007)、メーカーなどの標準施工法に従って施工する。
※木質系セメント板への釘による屋根葺材の施工は、釘の保持力が不確実になるので行わない。

4) 塗装

- ・木質系セメント板が直接天井面になり、塗装をする場合は、耐アルカリ性に優れたアクリル系又はウレタン系の塗料で、シーラー塗布（下塗り）から行う。

5) 留意事項

1. 使用環境に関する制限

- ・常時水に接する場所、プールや温泉施設など常時高湿度となる場所への木質系セメント板の使用は避ける。

4. 保管・運搬時に関する注意

- ・木質系セメント板を保管する場所は、直射日光や水分を避けた平坦な屋内とし、やむを得ず現場で保管する場合は、飼い木（長さ1820mmに対して4本）、パレットなどの上に平積みし（高さ1m以内）、雨に濡れないようシートなどを掛ける。
- ・鋭角な器物との衝突や角当ては、損傷の原因になるので避ける。

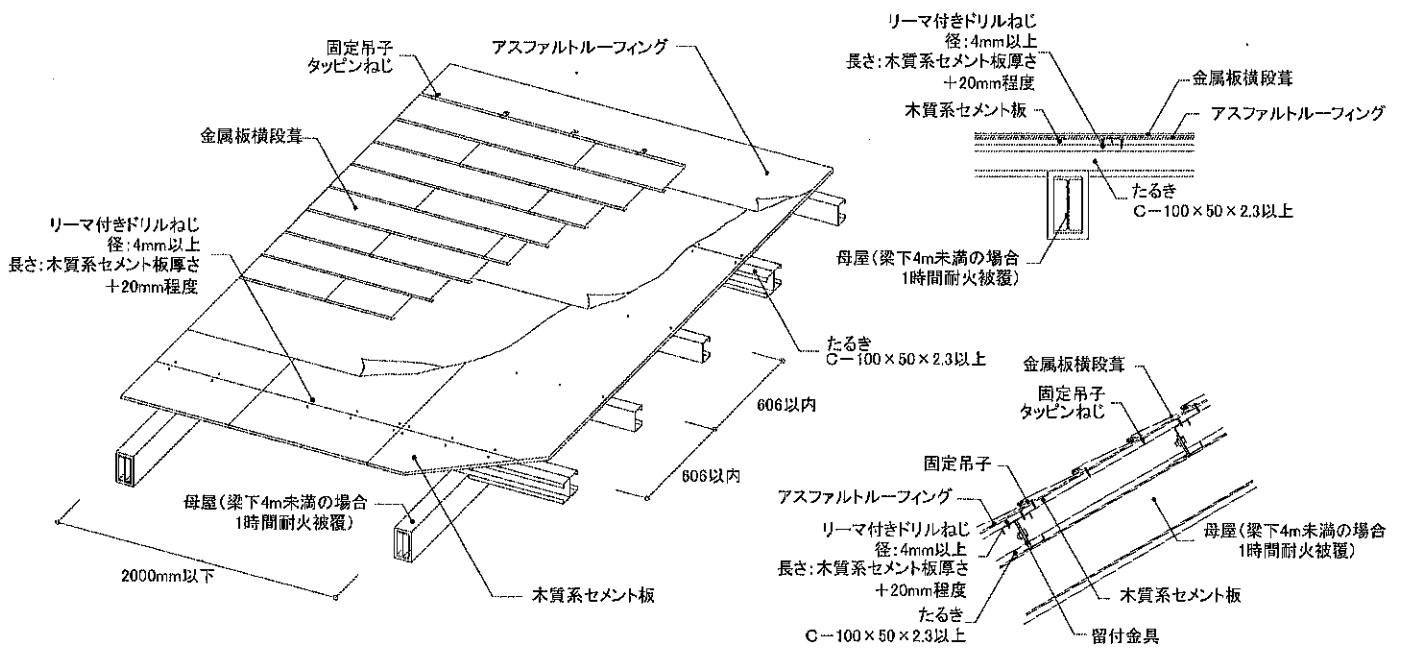
5. 施工時、作業時の注意

- ・木質系セメント板は、局部荷重や衝撃によって割れることがあるので、施工時には支持材（たるき）の上を歩く。踏み抜きや墜落防止のため、足場板を使用するか、安全ネットを張ってから作業を行う。
- ・重量物（屋根葺材など）は、大梁のある部分へ敷板を置いて、分散させて置く。
- ・強風下での施工は、風にあおられて危険なので行わない。

6. 粉塵に関する注意

- ・切断時には粉塵が発生するので、切断器具には粉塵吸引装置を設け、作業者は正しい作業服を着用し、防塵マスクや防護メガネを使用する。
- ・狭い場所で多量の切断作業を行う場合は、十分な換気を行う。

施工図例：金属板横段葺



施工図例：金属板瓦棒葺

